

烈しい苦難を宣告する原始的な呪いを自然自身が作りだす。

しかし、おおっている極度の不快は、忘却の水に浸ってしまった。

そして苦悶で節くれだった額の深い溝は、いつまでもスミーズになった。」(ボストンの医学校における挨拶)

この Morton の信奉者の書簡は、一八四七年五月三十日、Edward Warren に於て「Some Account of The LETHAON」(ボストン刊)に収載された。

(日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館)

## 15 華岡青洲の麻醉薬通仙散に関する 実験的研究

松 木 明 知

文化元年(一八〇四)十月十三日、紀州の華岡青洲は、大和五条村の藍屋かんに対する乳癌の手術を、彼が開発した通仙散(一名麻沸湯)を用いた全身麻醉下に敢行した。この事績は、日本の医学史の中でも特筆される業績であり、もちろん青洲の事績の中でも最大のものと言えよう。

青洲に関する研究としては、従来系譜的研究、学統の研究、弟子の研究、著述の研究、さらには通仙散開発の経過の研究など多岐にわたったが、通仙散それ自身に関する実験的研究は殆ど知られていない。

演者は、青洲と同じ処方に通仙散を製し、ウサギ、犬などに投与して、果して麻醉効果があるか否かを検討し併せて、従来問題になっている華佗の麻沸散の主要成分にされ

できた大麻(マリファナ)薬効成分はテトラハイドロカンナビノール(L)についても同様の研究を行い大変興味ある結果を得たので報告する。

右の実験の結果、通仙散を人の投与量の十倍量をウサギに投与しても、全く麻酔の効果はなく、犬では二倍量で死亡した。大麻については、ラット、犬、ウサギのいずれも全く麻酔効果がなかった。

このことから通仙散の効果については種差が著しく、青洲は動物実験をも行ったと言われているが、動物実験によつては、人への至適投与量を決定出来なかつたことは容易に理解できる。このため青洲は母や妻に協力してもらつて人体実験を行ったものと考えられる。また大麻については、第六十八回日本医史学会総会の会長講演でも発表し、その後も実験を続けているが、単独使用では全く麻酔効果はなく、麻沸散の「麻」は大麻ではないことが理解される。最後に通仙散を内服した教室員についても報告するが、これに関しては、日本医事新報(三三三六号、昭和六十年)に発表してある。

医学史の研究は史料に準拠して行わなければならないこ

とはもちろんであるが、そのみでは不十分なことがあり、今回行ったような実験的研究をも加味することが重要ではないかと思われる。

(弘前大学医学部麻酔科)